

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19520261

研究課題名（和文） ルネッサンス期アメリカ文学の共時的研究

研究課題名（英文） A Synchronic Study of American Literature in the Renaissance Period

研究代表者

野口 啓子 (NOGUCHI KEIKO)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：60180717

研究成果の概要（和文）：本研究は 19 世紀中葉のルネッサンス期アメリカ文学を、従来活発に行われてきた人種・階級・ジェンダーという視点からの研究に、(文学的) ナショナリズムという視座を加味して考察することで、この時代の文学的特質を横断的に検証することの可能性を探ったものであるが、その結果、このようなナショナリズムからの視座がこの時代の文学の再評価や、人種・階級・ジェンダーの区分を統合的に把握する手段として有効であることが明確となった。

研究成果の概要（英文）：This project aimed to elucidate the characteristics of the American Renaissance literature by examining (literary) nationalism in the works of mid-nineteenth-century America, based on the studies accomplished from the perspective of race, class and gender. And the results of this project make it clear that the element of nationalism is very useful in comprehensive understanding of American Renaissance literature.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	700,000	210,000	910,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、アメリカン・ルネッサンス、ナショナリズム

1. 研究開始当初の背景

本研究は、平成 16 年度から 17 年度に行った研究（テーマ：「E・A・ポーと 19 世紀前半のアメリカ——雑誌文学とナショナリズムを中心に」）を発展させたものである。この先行研究において、エドガー・アラン・ポ

ーを当時の（文学的）ナショナリズムとの関連で考察したが、その過程で 19 世紀中葉の（文学的）ナショナリズムという問題がルネッサンス期のアメリカ文学全体を横断的に捉える際の重要な要素として浮上してきた。また、ポーと同時代の作家との相互関連性が

大きな課題として浮上し、一人の作家を個別に研究することの限界にも直面した。本研究は、このような先行研究の限界を乗り越えるための発展的研究である。

19 世紀中葉のルネッサンス期アメリカ文学については、これまで人種・ジェンダー・階級という視座から盛んに研究が進められているが、それぞれ別個に研究されることが多く、また個々の作家による独立した研究で終わることが多い。近年ニューヒストリシズム的観点から、大衆文化や大衆小説といったサブカルチャーとの関わりが明らかにされたり、人種・階級・ジェンダーの観点から様々な作品が読み直され、再評価されている。このような状況を踏まえ、この時代の文学を包括的かつ横断的に捉えるもう一つの視座として「(文学的) ナショナリズム」が有効であると考え、この研究を企画した。

2. 研究の目的

本研究は 19 世紀中葉のルネッサンス期アメリカ文学を、従来活発に行われてきた人種・階級・ジェンダーという視点からの研究に、「(文学的) ナショナリズム」という視座をからめて考察しようとしたものである。

ルネッサンス期アメリカ文学については、これまで国の内外で膨大な研究が蓄積されてきた。本研究はこれら先行研究を踏まえ、その蓄積に (文学的) ナショナリズムの視座を加味することで、白人対有色人種、男性対女性、上中流階級対下層階級といった二項対立的枠組による従来の研究が捉えきれなかった側面を補うとともに、ルネッサンス期アメリカ文学の複雑に交錯する諸相を明らかにしようとするものである。

1812 年戦争後の 1820 年代から 50 年代は、ヨーロッパ (とりわけイギリス) とは違うアメリカ独自の文学、すなわち「国民文学」の創生に対する期待と情熱が高まった時期であるが、この時代はまた急速な経済発展と領土拡張を背景として「理想の民主主義国家」に対するヴィジョンが様々な形で表現された時代でもあった。F・O・マシセンはその名著 *American Renaissance* の中で、ルネッサンス期アメリカ文学の政治的側面を明らかにしたが、そこにはネイティブ・アメリカンの強制移住や奴隷制の問題、女性問題など、当時の歴史的・文化的考察が十分なされていないとは言い難い。また比較的最近では、サクバン・パーコビッチが *The American Jeremiad* の中で「アメリカを語る言説」に共通してみられる「アメリカ式ナショナリズム」を「エレミヤの嘆き」として図式化し系統づけてみせたが、これにより時代や政治・文学といった領域を超えた統合的議論がよ

り活発になった。しかしパーコビッチの研究は歴史的俯瞰としてはすぐれているが、ルネッサンス文学を十分に考察したものではなく、またレトリカルな分析が中心を占め、当時のアメリカが抱えた人種・階級・ジェンダーに関わる社会的矛盾への視座が欠けているといえる。

本研究はルネッサンス期を国民文学創生への高まりを見せた時期として広くとらえ、この時代の文学について、先行研究による蓄積を踏まえ、これにマシーセンやパーコビッチによって示唆されたデモクラシーへのビジョンとそこに織り込まれるナショナリズムの言説を読み解き、その複雑な諸相を解明しようとするものである。しかしながら、本研究はルネッサンス期のアメリカ文学全体を系統づけようとするものではない。むしろ、何人かの特徴的な作家もしくは作品をとりあげ、上述のような複合的テーマによる分析の可能性を探る初期的・実験的研究として位置づけられるであろう。

3. 研究の方法

(1) (文学的) ナショナリズムをめぐる言説を読み取るためには、古典的文学作品ばかりでなく、19 世紀中葉のアメリカ社会に広く浸透していた政治的、文化的言説を拾い集め、検証することが必要である。そのため、当時の雑誌や政治的パンフレット、演説なども収集する。とりわけ、エイブラハム・リンカン政治演説やそれをめぐる雑誌・新聞記事が有効である。また、雑誌や新聞やパンフレットに掲載された図像、戯画、挿絵なども補助的資料として収集し、検証する。

(2) 上記の支配的 (文学的) ナショナリズムと、黒人、女性といったマイノリティ・グループのナショナリズム的言説との比較検討を通して、その差異、共通点を探る。その際に、女性作家の階級差やスレイヴ・ナラティブにおけるジェンダーによる差異に留意する。

(3) 上記 2 点を踏まえ、アメリカン・ルネッサンス期の作家の作品を、エマソンを中心とする「主要な」作品ばかりでなく、南部作家 (エドガー・アラン・ポー) や黒人作家 (フレデリック・ダグラス、ハリエット・ジェイコブズ、ウィリアム・ブラウンなど)、女性作家 (キャサリン・セジウィック、ハリエット・ピーチャー・ストーなど)、大衆作家などを出来る限り広く検証する。

4. 研究成果

本研究は 19 世紀中葉のルネッサンス期

アメリカ文学を、従来活発に行われてきた人種・階級・ジェンダーという視点からの研究に、(文学的)ナショナリズムという視座をからめて考察するとともに、この時期を多角的にパノラマ式に捉えようとするものであるが、3年間で以下の研究成果が得られた。

(1) 初年度は、この時代の社会・政治的基軸となる第16代大統領エイブラハム・リンカンの演説を中心に、彼のレトリックとアメリカ国家の形成との関わりを中心にリサーチをし、検証した。その結果、彼の演説が共和国の理念やアメリカン・デモクラシーが直面した政治的・社会的矛盾を乗り越えようとする過程で、アメリカ国家形成およびナショナリズムの形成に重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

また、上記の研究過程で、リンカンと同時代を生きた女性作家ハリエット・ビーチャー・ストーとの、予想以上の関連性が浮上した。どちらも当時の大衆に、奴隷制の問題点を分かりやすく提示し、その過程でアメリカ国家形成とナショナリズム形成に影響力をもった点で酷似している。しかし一方で、フェミニズム的観点や人種問題などの観点からストーを見直すと、重要な差異が明らかとなった。リンカンの男性的、北部ナショナリズムに対し、ストーの場合は、女性による共同社会的要素が批判的にその共和国の理想に持ち込まれる。さらに、人種の観点からアフリカ系アメリカ人の作品に照射すると、その限界も明らかとなる。

これらの研究成果は、主として、“Harriet Beecher Stowe and Abraham Lincoln: Two Great Jeremiahs in Mid-Nineteenth-Century America” (雑誌論文③)および“Uncle Tom’s Cabin and the Black Antislavery Literature (II): Harriet Jacobs’s *Incidents in the Life of a Slave Girl*” (雑誌論文④)で発表した。

(2) 次年度は初年度の歴史的・政治的コンテクストへの考察をもとに、ルネッサンス期の文学的ナショナリズムの検証を行う。国民文学創生をリードしたラルフ・ウォルドー・エマソンと、それを批判的に捉えた南部作家エドガー・アラン・ポーとの比較を中心に、この時代の文学的ナショナリズムの特長を明らかにした。この際に、ルネッサンス期アメリカ文学とデモクラシーとの関わりを指摘したF・O・マンセンと、アメリカ的ナショナリズムの特徴とミレニアム思想とを関連づけたサクバン・バーコピッチを援用した。これにより、ハーマン・メルビルやナサニエル・ホーソンとの比較や、様々な女性作家、黒人作家との比較の必要性が新たに浮上した。

上記の研究成果は、『ユリイカ』にみるメディア戦略と文学的ナショナリズム」(学会発表②)、『ユリイカ』にみるメディア戦略と文学的ナショナリズム」(雑誌論文②)、『ユリイカ』再考——ポーの文学的ナショナリズムとメディア戦略」(雑誌論文①)、「小説 III 空想科学小説 『ハンス・プファアルの無類の冒険』を中心に」(図書②)、に反映されている。

(3) 最終年度は初年度、次年度の研究成果を踏まえたうえで、北部中心の文学的ナショナリズムとマイノリティ・グループの文学、とりわけアフリカン・アメリカンのスレイヴ・ナラティヴや女性作家の家庭小説にみられるナショナリズムとの比較対照により、ルネッサンス期アメリカ文学の特徴(類似性と差異)を捉えることを試みた。その結果、この時期のアメリカ文学においては、人種・階級・ジェンダーの問題が、ナショナリズムやさらには帝国主義的要素と奥深いところで結びついていることが明らかとなった。

とりわけ、女性作家による男性中心の民主主義のビジョンに対する批判には、ネイティヴ・アメリカンや奴隷制における父権的要素があぶりだされていること、また、1850年代以降は、このような父権的要素と資本主義経済が関連付けられて語られるという特徴がみられることが明らかとなった。しかし、同時に、女性作家の作品も、ナショナリズムによって社会矛盾を超越しようとするあまり、それが男性作家同様、対外的には、帝国主義的要素を内包していることも明らかになった。

これらの研究成果は、『アメリカ文学にみる女性改革者たち』(図書①)ならびに「ポーとストー」(学会発表①)に部分的に反映されている。

本研究により、以下の課題が発展的に浮上した。

① 本研究で明らかとなった文学的ナショナリズムが、同時期の主要作家、メルビルやホーソンやソロー、ホイットマンにもあてはまるのか。

② 本研究では、主として奴隷制問題を中心にナショナリズムを検証したが、ネイティヴ・アメリカンの問題も同様のことがいえるのかどうか。

③ ナショナリズムと通底する帝国主義的要素については、南北戦争と戦後のアメリカの変化についても検証が必要である。

④ 国家と民主主義を語る際のレトリックの問題を検証する必要がある。奴隷制の問題が国家的議論に発展していたこの時期、社会に広く浸透していたレトリックと作家個人のオリジナルなレトリ

ックとの境界を見極めること、あるいは、個々の作品に表れる言説が、他のレトリックの影響を受けているか否かを見極めることは極めて困難な作業であるが、時代と社会の共有の言説を検証していくことは、本研究において今後の重要な課題である。

⑤人種・階級・ジェンダーに加えて、地域差（北部・南部・西部）も重要な要素として加味する必要が浮上した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計4件）

- ①野口啓子、「『ユリイカ』再考——ポーの文学的ナショナリズムとメディア戦略」（2009年ポー学会年次大会におけるシンポジウムの発表原稿を発展的に加筆・修正したもの）、『津田塾大学紀要』、査読無、42号、2010、71-89.
- ②野口啓子、「『ユリイカ』にみるメディア戦略と文学的ナショナリズム」（シンポジウム：『ユリイカ』を読み直す——変貌するアメリカとポーの戦略』の研究報告）、『ポー研究』、査読無、1号、2009、40-50.
- ③野口啓子 (Noguchi, Keiko)、"Harriet Beecher Stowe and Abraham Lincoln: Two Great Jeremiahs in Mid-Nineteenth-Century America", *The Tsuda Review*, 査読無、No. 53、2008、1-36.
- ④野口啓子 (Noguchi, Keiko)、"Uncle Tom's Cabin and the Black Antislavery Literature (II): Harriet Jacobs's *Incidents in the Life of a Slave Girl*", *The Tsuda Review*, 査読無、No. 52、2007、1-20.

〔学会発表〕（計2件）

- ①野口啓子、「ポーとストーリー」（シンポジウム：「ポーとアメリカ文学——ポスト生誕200年の光芒」における発表、司会：伊藤詔子、発表：丹羽隆昭・野口啓子・高野泰司・平石貴樹）、日本英文学会、2010年5月、神戸大学
- ②野口啓子、「『ユリイカ』にみるメディア戦略と文学的ナショナリズム」（シンポジウム：『ユリイカ』を読み直す——変貌するアメリカとポーの戦略』において司会および発表、河野智子・西山けい子・野口啓子・元山千歳、コメンテーター：菊池誠）日本ポー学会、2009年9月、東京大学

〔図書〕（計2件）

- ①野口啓子・山口ヨシ子編、彩流社、『アメリカ文学にみる女性改革者たち』（計14名

による執筆、1番目「はしがき」及び4番目「ニューイングランドの女性改革者たちハリエット・ビーチャー・ストー『牧師の結婚』」2010、1-5 & 71-93.

- ②八木敏雄・巽孝之編、研究社、『生誕200周年記念必携 エドガー・アラン・ポーの世紀』（八木敏雄・巽孝之・伊藤詔子・井上健ほか計23名による執筆、10番目「小説III 空想科学小説『ハンス・ブファールの無類の冒険』を中心に」）、2009、187-201.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野口 啓子

(津田塾大学・学芸学部・教授)

研究者番号：60180717

